

地域とともに考える「まちおこし」 ——東京都北区十条を事例として——

和田 康一郎・秋山 秀一・藤田 洋治

はじめに——シンポジウム開催までの経緯、ならびにシンポジウム概要

東京成徳短期大学が東京都北区の十条にキャンパスを構えて、40年を越える。

十条という街は実はなかなか面白いところで、雑誌等で、

「東京のなかで住みやすい街ベスト10」

などという企画があると、必ず上位に登場する。会社帰りに立ち寄ってくれる街（あるいは店）のファンも少なくない。

十条という街を歩いてみると、江戸時代には江戸と城下町・岩槻とを結び、さらに徳川家康を奉る東照宮のある日光へと通じていた重要な街道があり、そこに富士講の基地としてこの地域の信仰の中心となっていた「富士神社（通称、お富士さん）」があつたり、と、歴史的にもたいへん興味深いところである。

また、十条銀座をはじめとする「元気な商店街」もあり、全国的に大型ショッピングセンターに押されて姿を消しつつあるなかで、十条はほかの街に比べると、「個人商店」が頑張っている街でもある。大衆演芸で有名な篠原演芸場もある。ラーメン、うどん、焼き鳥、フランス料理、居酒屋…、「うまい」と評判の店も多くある。実際に十条の街を歩き、店に入り、店の人とコミュニケーションをとってみると、なんとも魅力のあふれる人々にたくさん出会う。話をしていると、だれでも、「昔のように、今よりもっと活気のある街にしたい」という強い気持ちを持っていることが感じられる。それは、東京成徳短期大学に勤務するわれわれも、全く同じである。

それならば、十条に関係のある人たちが集まって、この街を、元気で、今以上に魅力ある街にしていく道があるはずだ。まずは出来ることから始めよう。十条という街を、より活気のある街に、そして若い人から高齢者まで居心地のいい街にするために、どんなことをしていったらよいのだろうか、皆で知恵を出し合って考えて行こう。このような狙いをもって、東京成徳短期大学十条台地域交流研究会（代表：秋山秀一本学教授）と短大の主催による公開シンポジウム「十条という街を考える」が開催された。会場はすべて東京成徳短期大学である。

共催：いちょう通り十条駅西口商店会、後援：北区教育委員会、協力：北区まちづくり公社、とあるように、大学と商店街と行政が、がっちりとスクランブルを組んで実施されたこのシンポジウムには、地域住民の方々をはじめ、多くの人々が出席された。

最後に各回の開催日と講演者・パネリストを紹介する。なお、小島靖子氏（スワンベーカリー十条店役員）と山本興司氏（いちょう通り十条駅西口商店会会長）には、4回ともパネリストとしての参加をお願いした。パネルディスカッションの進行は4回とも秋山秀一が担当した。

「十条という街を考える」 2002年9月28日

基調講演：秋山秀一

パネリスト：小島靖子氏・山本興司氏・内田隆氏・浅川謙治氏・田村純郎氏

「十条という街を考えるⅡ」 2003年9月27日

基調講演：秋山秀一

パネリスト：小島靖子氏・山本興司氏・中澤嘉明氏・落合明江氏・田村純郎氏

「十条という街を考えるⅢ」 2004年10月2日

基調講演：川野一宇氏

パネリスト：小島靖子氏・山本興司氏・村居秀彦氏・関秀明氏・田村純郎氏

「十条という街を考えるⅣ」 2005年12月3日

学生発表：学生から見た「街の印象」・「まちづくりへの提案」

パネリスト：今井晴彦氏・亀井裕幸氏・小島靖子氏・山本興司氏

I 基調講演と四年間の流れ

このシンポジウムは、まず「十条を知る」ための基調講演から始まった。台地のしっかりした地盤の上に位置し、地震にも強く、洪水の心配も無い点、二つの駅に挟まれて交通の便が良い点を確認し、また、岩槻街道・演芸場通り・十条銀座・いちょう通り・東十条駅南口から短大への道等をもう一度歩き直した発見が報告された。

いくつかの銀行が十条から撤退を始め、70年80年と続いている店が閉店を余儀なくされる厳しい状況の中で、二つの方向がシンポジウムで言及されたように思える。一方は街に活気を与えるようという動きであり、他方は性急な変化を抑制する動きである。商店会では当初、十条を「学校の街、学生の街」にすることが活気回復の道との構想があったもようだが、ディスカッションを通して、十条の良さを再認識する形での方向性の検証が行われたと思われる。十条の良さは、障害者や高齢者を孤立させない、下町風情緒を残している点にあることが、パネリストの発言から確認された。「スローライフ」と「ファストライフ」を比較するなら、十条には、前者に重点を置いた街づくりが向いているとの指摘は、今後とも重視されるべきであろう。子育てが出来る街へと変貌することも、十条の課題として指摘されている。

第2回より本学新校舎に会場を移した。基調講演では、約60軒の個人商店が活動を支える十条駅西口商店街の様子を確認し、十条駅から短大への道をたどり、この一年の十条の街の変化について言及した。新校舎6階から見える風景も紹介され、十条のイメージの膨らませや再確認を行った後に、討議が行われた。

この回の特徴は、新たな会場のITが駆使されたこともある、ネットを通しての情報発信が注目を集めた点にある。北区産業振興課の観光ホームページや、十条から情報発信しているインターネットサイト「らくだ銀座」が、会場のスクリーンに映し出され、参加者全員が、ネット空間への十条の情報発信のありさまを実感できた。また、この年は北区が多彩な活動を手がけている様子が印象深かった年もある。3月の上記ホームページの開設の他、10月1日から11月28日までの北区フォトコンテスト、11月15・16日の「十条遊縁市（ゆうえんち）」というイベントの企画が紹介され、さらには予告として「北区名品ガイド」への投票が会場に呼びかけられた。

第3回は、NHKアナウンサーで「ラジオ深夜便」担当の川野一宇氏に基調講演を担当していた。シンポジウム2日前に十条銀座から演芸場通りを初めて歩いた際の印象を川野氏は語り、十条の特徴として「活気にあふれた元気のいい街。歴史がある。居心地のいい狭さ・歩き良さ」を挙げた。また、相手が求める多様なものを鋭敏にキャッチして、具体的な形に表していく努力を必要とする点で、番組の構成と街づくりには相通じる難しさがある旨言及した。更に、商店街の大きな柱・根底は、来て下さる方にどう温かく接するかにある点を確認し、十条の人々の意欲と他の街

との連携も考える視野の頼もしさについて語った。聴衆に自信と活力を与えてくれる講演であった。

前回に比しての情報発信の進歩が明示された一方、人を癒す街としての十条・北区の雰囲気がさらに強調されたのが、この回のシンポジウムであった。現代と下町の良さの両面を踏まえた街づくりこそ、おそらく十条の目指すべき方向であり、目指すべきコミュニケートの仕方であると、参加者の多くが共通認識を持てたように思う。もう一つの特徴は、十条を考えるにあたり防災の観点が強調され出したことである。大蔵省住宅地跡をどうするかについてが論議を呼んでいる様子が、参加者にもよくわかった回であった。

第4回の学生発表に関しては、後述する。今回は、路地が多いという新たな十条の長所が話題に上るとともに、前回の論議がさらに発展を見せた。十条は現在は良好な雰囲気だけれども、サポートを受ける必要がある人口が今後増えた際に、十条はサポートする人を十分備えられるかという懸念が提出され、新たな住宅地の必要が訴えられた。しかし、行政側は防災機能のある公園の必要性を、阪神大震災などの災害を想定しつつ説いた。この綱引きがどう決着を見るかで、十条の将来は大きく左右される。

4年間のシンポジウムを通して、論議は有意義な深まりを見せた。十条の魅力を将来も継続し、効果的に広報していくためには、地域の人々、行政、学校が、それぞれに取り組むべき課題を担う段階に差しかかったと考えられる。大学・短大でいえば、十条に住み始める若いお母さんが増えるような水向け、さらに観光を学びつつ地域に情報発信する学生の育成が、十条の問題点を解消し、活性化に結びついていく取り組みになるであろう。ここしばらくは各のできる取り組みを進め、数年後には盛大かつさらに有効な手段を企画したいと、十条台地域交流研究会は考えている。

II 各パネリストの発言

続いて、パネリストの発言を振り返り、それぞれの方がもたらした示唆・指摘の意義を検証する。レギュラー・パネリスト、行政側の立場でのパネリスト、外部からの視点を提供するパネリストの順で紹介する。なお、() 内は、シンポジウム参加時の役職名または所属である。

十条には都立王子養護学校という、知的障害を持った子ども達が勉強する学校がある。小島靖子氏は、養護学校の卒業者が育った街で働ける場ができるいかと考え、「スワンベーカリー」を開店した。現在はパン工場とカフェを併設した店になっている。

小島氏が「障害者から」の視点を毎回提供してくださったおかげで、十条の街づくりから重要な要素が抜け落ちることが防げたと思う。<孤立しやすくストレスもためやすい障害者がほっとできる場所は、他の人にとってもほっとできる場所である。><障害者や老人が使いやすい街はいろんな人が使いやすい街。>という発言がシンポジウムを通して浸透し、十条は以前に増して「障害を持った人たちに対して優しい街」になれたのではないだろうか。

第4回における小島氏の示唆は重要と思われる。中央区のデイケア・センター やケアホームを見学時に、ケアする立場の人が住む施設を作つてそこに住んでもらうことが、中央区の人口増加につながっている現象を発見し、十条にも助ける側の人が住む施設を作る必要性を、氏は説いた。十条の長所を守っていくために、傾聴すべき意見であろう。大蔵省住宅跡地の使い方も視野に含めて、考えなければならない問題である。

山本興司氏は、大吉飯店を経営する傍ら、愛する十条の活性化のために真摯に取り組んでいる。行政の関係者やさまざまな方面の識者に話を聞きに行き、何とか良いアイデアを手に入れられるよう奔走・奮闘している。また、シンポジウムにおいては、前の回の成果を踏まえてこの一年十条の商店会はどんな動きをしたかを欠かさず報告して、行動する商店会長の側面を聞き手にも垣間見せ

た。「若年層の減少、高齢化の進行」という現実の中で、いかに活気のある商店街を作るか、商店街に活気を取り戻すために不可欠な、人に訪れてもらえる街づくりのためにはどうすればよいのか、これらについて考える氏の真剣さと意欲は、シンポジウムの参加者に毎回熱く伝わっている。これがシンポジウム以外でも伝わり、氏の活動が地域の人々にも今以上に見えるものとなることが、今後の課題であろうか。

田村純郎氏（北ケーブルＴＶ役員）は平成8年に北ケーブルＴＶを開局し、地域情報化事業を開いた人物である。第1回での、スローライフ見直しの折から「時代は十条を向いている」という発言は、参加者に勇気を与えた。第2回の「らくだ銀座」の紹介、第3回では「らくだBOX」ほかレンタルBOXを紹介と、地域の中に情報発信局を作る取り組みの進展具合を、鮮やかに聴衆に示した。また2004年9月23日の「アジアの子供の夢舞台」への言及を通して、人間の交流においては素朴さ・人懐っこさが重要な役割をする例を、氏が語った点も印象深い。

次に、行政側の立場で参加したパネリストの発言を振り返る。

内田隆氏（北区子ども家庭部長）は、女性の目子供の目から見た街づくりの必要性を、願いを込めて語った。子供の数が少ない現状から、子育てが出来る街への脱皮ができれば、それが商店街の発展につながる点を指摘した。また、街づくりは「ファストライフ」「スローライフ」双方の観点を取り入れ、どちらに重点を置くかを決めるなら「スローライフ」の方にすべきだと、氏の見解は、十条の将来像を考えるうえで示唆的であった。

浅川謙治氏（北区企画部副参事）は、アクションの起こし方についてのアドバイスが的確であった。プロフィールでも「進んでいるところのノウハウは、盗んだ者勝ちだから、もっと交流を！」と呼びかけ、パネルディスカッションでは早稲田や亀有の例を挙げた。商店街と学校が多いという特長が、十条発展の核となるとの見解を示し、アクションでは学校よりも商店会から動く方がスマートである点、多くの場所は、商店街→学校→役所のルートで、役所を動かした点を、アドバイスした。

中澤嘉明氏（北区地域振興部産業振興課長）は、2003年の北区の多様な取り組みの紹介に努め、北区のフットワークの良さを印象づけた。産業振興課の観光HPをスクリーンで開き、見所をコース仕立てにした10のコースを紹介し、地図の拡大方法や、赤丸数字をクリックして見所の解説文を読む操作を示した。イベント「十条遊縁市」、北区フォトコンテストの宣伝、北区名品ガイドへの投票の呼びかけなど、具体的な活動のありさまが聴衆に伝わった。このように街づくりに興味を持つ人を満足させる情報・具体案が多かったことも、翌年のシンポジウムの参加者増加（地元以外に、神奈川県茅ヶ崎市、千葉県松戸市、市川市からも来場。）につながったに違いない。

村居秀彦氏（北区都市整備部鉄道立体担当課長）は十条まちづくりスタッフでもある。2004年3月に、東京都の防災都市づくり推進計画が策定され、23区の重点整備地域11地区の中に、十条区域が選ばれたとの情報が伝えられた。大蔵省住宅地跡を公園にするという計画には、その影響のほかに、そもそも取り決めが背景にある点も明らかにされた。（公務員宿舎があった時点でも、将来は公園にする場所を、たまたま一時的に国が借りていた形であったという。）十条の将来像としては、居心地の良さというソフトの面はそのままで、ハードの面で環境を整備する必要性を、氏は強調した。

亀井裕幸氏（北区まちづくり推進課長）は多くの公園作りに携わっている。阪神大震災なみの地震並びに火事が起こるケースを想定した際、十条の住民全員が避難可能にするには、試算によると10haの何もない場所が必要だという情報を、シンポジウム参加者に伝えた。それは大蔵省住宅跡地を防災機能のある公園にする動きを、後押しするに相違ない。しかし氏は、公園作りには地域の住民の要望の採択が重要だとも語っている。結果的に公園とは別になるかもしれないが、十条の良

好な雰囲気を守る配慮として、中央区に倣った、ケアする立場の人が住める施設の場所確保・造営についての計画も、住民の声を活かしつつ考えていただけるようお願いしたい。

続いて、外部からの視点を提供した3名のパネリストの発言の趣旨を紹介する。

第2回の落合明江氏（DAI-X出版事業部）は、生涯教育とインターンシップという観点を提供した。商店街で学生がアルバイトや実地研修を行うことで、店主のポリシーやプロの技を学ぶという発想は、学生と地域の交流の姿として、考え得るところである。氏は、2002年12月に、早稲田大学と渋谷区が様々な分野で連携するという提携を行った例を紹介していた。第3回以降、レンタルBOXへ出品するという形で、実際に売り手の立場を体験してみては、などと別の方法も提案されたため、あまり顧みられていない印象があるが、検討の価値がある提案である。

第3回の関秀明氏（㈱古今書院編集部）は、価値の反転例や、都市も観光地に変わる傾向について語った。田舎のものとして興味の対象外であった「棚田」が、昨今ブーム化した例などが、価値の反転である。また、昔は風光明媚な土地が観光地であったが、現在は整備された街が観光地として人気を集めている傾向も、反転の例と言えよう。かつて北区に住んだ医師が、訪れた都市をイラストに描いたカルタも、会場に紹介され、街にも「癒し」の機能がある旨を説いた。例えば豪雪自体を観光の売り物にした新潟・長野県境の秋山郷のように、見方を変えることで、十条にも何か他地域にアピールできる観光資源が見出だせるかもしれない、と思わされた。

第4回の今井晴彦氏（都市計画コンサルタント）は、十条は「路地の町」で、その良さは地域コミュニティがしっかりしている点だと指摘した。子供が路地で安心して遊べる街づくりは、将来における理想的な地域社会像の形成に結びつくものであり、十条にはそのポテンシャルがあると、十条の長所の意義を明示した。また、学生が情報発信をする形での十条の活性化の方策として、東京成徳短期大学での「十条観光情報センター」の設立を、案出した。

以上、パネリストの発言を振り返ってみると、その発想・情報の豊かさが確認できる。十条以外の地域からの参加者もあったシンポジウムであったが、これは他の地域に、商店会・学校・行政の三者が意見交流をする試みが、未だ少ないと現われではなかったかと考える。

III 参加者の反応

毎回、参加者がどれほどになるのかは、大きな関心事である。参加者が少なければ、開催意義も半減してしまうし、そもそも目的の地元の‘まちづくり’への提言が届かなくなるからである。しかし、決して多いというわけではなかったが、毎回、熱心に聞き入って下さる参加者も多く、質問も多く出されている。また参加者は、都内の他の地域からも千葉県や神奈川県からの参加者も見られた。「十条出身なので」「十条のまちづくりを参考にしたい」など、他地域の参加者の目的は多様であったが、注目している人がいることもわかった。一方、十条が高齢化が進み、活気がなくなりつつあるという危機感は、地元住民の方々のほうに強いと感じられた。そういう意味で、アンケートを集計してみて、改めて地元住民の十条への愛着の深さが伝わってくる。この公開シンポジウムは、また地元の人々の十条に寄せる思いを発掘することもできたと思うのである。

アンケートは毎回実施した。項目は、次の2項目で、4回とも同じ形式であった。

〔アンケート項目〕

氏名・連絡先（任意の記述）

- ご意見ご感想などご自由にお書き下さい。
- この催しをどのような方法でお知りになりましたか。該当するものを○で囲んで下さい。

2番目の項目は、どのような広報が最も効果があるのかを、調査する目的であったが、こちらは、意外にも「その他」が多く、「図書館に置いてあったチラシ」「友人」などがあげられている。その一方で、「ホームページで探しても載っていなかった」という意見も寄せられた。北区広報誌にも、本学ホームページにも載せ、また区立図書館や十条駅周辺、キャンパス近郊の店にもポスターを貼ったにも関わらず、関心を持つ人まで情報が届いていない現状を語るものであろう。広報を考えるうえで、どの手段が最も効果的であるかが、課題として残った。なお、参加者にも高齢者が多いために、ホームページはあまり活用されていなかったのかもしれない。

また、アンケートの回収率は、比較的高く、第1回目は約7割、第2、3回目は約8割、第4回目も約8割であった。特に第3回目は、参加者の85%の方から回答を寄せていただいた。

高い回収率の理由は、「まちづくり」に興味がある人の参加、街をどういう観点から見るかが、人によって相違するため、などがあげられよう。毎回、褒め言葉から苦言、感想を多く頂いた。

その自由記述欄の「ご意見ご感想」について、まとめてみたいと思う。第1回目から、この‘十条’という街がメインテーマであったために、当然多くの意見や感想が寄せられた。「こういうシンポジウムがあって、十条という街が実際にいい所なのだと改めて感じることができた」という感想が多くあげられた。デパートもない、若者が少ない、映画館も遊ぶところもない、という一見マイナスイメージで十条を捉えるのではなく、「下町’的で住みやすい街、という面が理解されたように思われる。

具体的には、十条銀座に代表される商店街、その活気、物価の安さ、また篠原演芸場の存在などがあげられた。「都心に近く交通便利で物価が安い」とガイドにあり中近東の人々が十条に住んでいることを書いてくれた人もいた。また学生も、受験するまで十条という街の存在も知らなかつたが、「卒業後もできれば十条に住みたい」という意見を寄せている。公園も多く、商店街も楽しい、という感想も多い。

‘下町’的な温かさも、話題になる。第2回で特にこのことが話題となった。下町は、下谷や浅草、日本橋や深川などを指し示す言葉であるが、十条にも人情味、温かさがあることで、下町的・下町風ということになったものと思われる。「人に優しく思いやりのある商店街へ」という提案もあった。老齢化が進んでいる中で、徒歩で買い物した際に重い荷物を持って帰る苦痛を和らげる工夫はないものか、配達などの方法はできないものかというものである。

「まちづくりは『人づくり』であり『仲間づくり』である」という提言もあった。商店街の人たちも参加しているこのシンポジウムでは、具体的な提言も多く出されている。

十条の‘まちづくり’に関連して、「商店会はいくつに分かれているのか」という質問が第2回、第4回にそれぞれ出ている。商店会の企画や動きが一般の人々には、全く見えていないことの現れである。地元住民にも見える活動が必要なのであろう。

行政へも「行政が主体となってハード面の整備を進めていく時代は終わった。区として、今後一番力を入れていくことは、区、住民、NPO、民間企業等と協働してまちづくりを進めていく『仕組みづくり』である」という意見があり、また「大学と地元商店街の関係をこれまでのような協力と言うよりも『結合』状態に強めることが必要」という指摘、「この『公開シンポジウム』を含め、『まちワークin十条』『いちょう通り商店会と家政大』の話し合いが行われています。これを機会に‘居心地のいい街’十条に変わって行けば」という意見も出された。

実際に、シンポジウムに参加して、街が変わるという可能性を実感できた人、十条の良さを再発見した人も多いと思われる。

十条という街を考えて、具体的にどのようなものを造るか、ということもパネリストの方々で提

案が異なってくる。第4回では、公園を造るという行政側の意見と公園よりも若者が住みやすいアパートの建設をという小島靖子氏の提案が、それぞれの立場からの見方の相違で、いろいろな感想があった。防災のためには公園が必要という北区の立場、高齢者や身障者の介護のためには若者が近所に住める環境を造らねばならないとする小嶋氏。ともに正しいのだが、これは参加学生にもおおきな影響を与えた。この第4回は、「まち歩き」の面から今井晴彦氏も話をしていて、狭い道が昔の文化を残していることを話され、観光とまちづくりを考えていた学生は、「大きな道路を作ればいいと思っていたが、小さな路地にも良さがあることがわかった」「住宅が密集しているので公園が必要だとわかった」「小島さんの話には共感できました」と多様な反応があった。また、「まちづくり」の難しさを考えさせられた提案でもあった。

また、まちおこしのためのいろいろな提言もなされたが、次の学生による基調講演「十条という街の印象」「十条という街のまちづくりへの提案」にはほぼ集約されると思われる所以、学生の発表をそのまま掲載する。この発表は、「地域開発論」(藤田洋治担当)の受講生のアンケートを集計分析したものに基づいたものである。

IV 学生発表

十条という街の印象

言語文化コミュニケーション科1年 白澤亜希・蓑毛秀美

東京成徳短期大学言語文化コミュニケーション科1年の白澤亜希と蓑毛秀美です。二人とも、観光コースで観光について勉強していますが、まだ勉強をはじめたばかりで、すごいことを発表するのは無理ですが、十条という街について、授業を受けている学生30名ほどの考えをまとめたものです。私たち学生が感じている十条という街について、発表したいと思います。

発表することになって、授業のメンバーの提出したものをまとめる前に、もう一度十条の街を歩いてみました。このキャンパスから、十条の駅前に向かい、十条駅西口商店街を大通りに沿ってしばらく歩き、十条銀座のほうに大きく迂回しまして、そして十条銀座を歩き、富士見通りのほうものぞきながら、再び十条駅前に戻り、そこから短大まで戻ってみました。1時間近く歩いてもう一度見てみたのです。昼の1時頃から歩いたせいもありますが、意外にお年寄りの方が多く、買い物カートを押している人の傍を自転車がすり抜けるところを見て、危ないなあと思いました。また、みどり屋がバーゲンをしているのか、大変な人だかりでした。十条銀座は人が多いと思ったのですが、富士見銀座のほうは、急に人が少なくなって、少し寂しいと思いました。

私たち学生の見た十条という街の印象は、次のようにまとめられます。

十条という街の特徴として、次の7項目をあげてみました。

1番目は、「住宅街で、ほとんどが地元の人」という点です。十条駅の近くを歩いていたり、お店の人との話しぶりから、顔見知りの人が多い街だなと思いました。

2番目は、「下町ふうで、やさしい街・安心できる街」であることです。先にもあげましたが、お店の人と話ができる、気軽に知らないことも教えてもらえるような気安さ、安心感が感じる街です。

3番目は、「活気ある商店街・物価が安い」という点です。多くの人がこれを十条の特徴にあげてくれました。また、小さな店がたくさんあり、お菓子屋だと、靴屋とか、総菜屋といった一つの専門のものを扱っている店が多いのも特徴だろうと思います。

4番目は、「お年寄りが多く、一方子どもが少ない」ということです。何人かが特徴としてあげてくれましたが、一部の人は「子どもが多い」とも言っていました。古くからの住宅地で、ずっと住んでいらっしゃる方も多いのではないでしょうか。新興住宅街とは違った特徴であると思います。

5番目に、「学生が多いが、若者が少ない」ということが指摘されました。東京家政大学や本学、

また資生堂の専門学校などがありますから、若者は多いと思うのですが、街の中を歩いていますと、夕方のラッシュ近くでも、高校生や学生を除くと、確かに若者が少ないよう感じました。

6番目には「公園・教育施設が多い」ということ。あちらこちらに公園がありますし、学校も多くあると思います。また本学の南には、北区中央公園という大きな公園もあります。

7番目には、「大型店や風俗営業がない」ということです。大型のお店、デパートなどがないということは、下町的な雰囲気とつながるかもしれません。また風俗営業のお店がないということは、街が優しい雰囲気であることに結びつくように思います。

以上が、私たち30人ほどの、十条という街に対する印象の主なものです。

次に、少数意見ですが、これも特徴となると思われますので、あげてみました。

8番目は「富士神社などの歴史的なものがある」という指摘です。富士神社のお祭りが夏にあり、またその傍を、岩槻街道が走っています。歴史的なものは、もう少しアピールしてもいいのかもしれません。

9番目に「自衛隊の駐屯地がある」こと。これも十条の大きな特徴ですが、「まちづくり」には、ちょっと結びつかないかもしれません。

10番目に、3人の人があげている「猫が多い」ということ。これは特徴になるのかどうか、難しいのですが一応載せてみました。

そして11番目に、「不良がない」ということ。暴走族の話とか、駅前に不良がうろつくということを聞いたことがありません。健全な街というのは、誇れるものではないでしょうか。

私たちの感じた十条という街は、以上のようなものになります。これに、十条というと、お店という反応がありますが、商店街、お店の特徴を加えますと、次のようにになります。蓑毛さんに替わります。

続いて、十条の商店街（その1）です。

まず、一番多いのが「ラーメン屋が多い」ということです。中華料理店やらーメン屋さんが多く、ラーメン激戦区という言葉を使った人もいました。

2つ目には「いろいろな店があり、値段が安い」という点です。特に、野菜が安いと答えた人もいました。

3つ目は、「和菓子・美容院が多い」という指摘です。確かに和菓子屋は幾つかありましたし、美容院も駅の周辺を中心に多くありました。

4つ目は、これも特徴だと思いますが「小さな店・個人の店」が多いということです。

5つ目は、いいことではないのですが、「ATMが少なく、若者が集まる場所が少ない」という点です。コンビニでもお金がおろせますが、ATMが少ないことは心配です。また若者が集まる場所が少ないようにも思います。ただ、私たちは十条の南口と学校を往復していますので、よくわからない可能性があります。

もう1枚のほうには、二つ特徴をあげました。

6つ目として「十条銀座にはJチャンというマスコットがいる」ということです。せっかくのマスコットをもう少し目立たせたらいいのにと思いました。7つ目には「篠原演芸場など、よくマスコミに紹介される有名店などがある」という点で、結構テレビに紹介されることが多い街だと思います。

さて、このような十条の特徴を、見方を変えてみると次のようにもまとめることができます。ちょっと変わった視点かもしれません。「十条にないもの」というものです。十条の特徴を私たちがあげたものの中にあったものです。

最初に「デパートや大型店」がないということです。これと次の2番目の「駅ビル」、そして3番目の「大きな工場や企業ビル」などがないことは、大きな特徴であると思います。これらのもの

がないということは、住宅街であることを表しています。また「下町ふう」な雰囲気と表裏の関係になっているような気がします。デパートなどがないから、小さな多くの店があり、お店と客の交流があることにつながっていると思うのです。

4番目の「ゆったりした歩道や広い通り」ということがあげされました。確かに小さな通りが多く、また歩道がない狭い通りも多くあります。お年寄りも多い街ですし、まちづくりにおいて、ぜひ急いで改善してほしい点です。

続いて、十条の良い所というものを集めてみました。まず、「下町ふうで、お店の人と交流できる、優しい街、安心できる街」だということです。もう説明するまでもないと思います。そして次に「池袋や新宿などに近く、都心に出るのが便利」という立地条件です。住宅街として大切な条件であると思います。

3番目に「商店街がにぎやかで、物価が安く、生活しやすい住宅街」ということがあげられます。さらに、次のページに移りますが、4番目に「健全な街で、風俗営業がなく、不良がいない」という治安の面での安心感がある街であること。

最後に「公園・教育施設が多く、また富士神社や岩槻街道などの歴史的なものがある」という街の歴史的な面。できれば、このような歴史を感じることのできる場所をもっと目立つようにしたほうが、十条という街のイメージがあがるのではないかでしょうか。

最後に、まとめとして、「十条の良いところを生かした‘まちづくり’」ということをあげました。街の特徴を生かして、住んでいる人々が楽しくなるようなまちづくりをお願いしたいと思いますし、次にあげましたのは「住んでいる人・訪れる人に優しい‘街’」ということです。住みやすい下町風な温かい街だと言いましたが、訪れる人を多くする工夫が必要だと思います。そして、「見るところ・遊ぶところ・生活するところ」とあげましたが、住宅街としては素晴らしいと思う反面、見るところや遊ぶところが、不足していると思います。私たちは、学生として十条に毎日のように通っていますが、「大学どこ？」と聞かれて「十条」と答えて、十条がどこかわから覚えないことのほうが多いです。「赤羽の次の、十条という駅」と答えることが多いのですが、「十条」とだけ答えて、「いいところだね」と言ってもらえるような街になったらいいと思います。

続いて、長所を生かし、さらに街を発展させるには、どのようなことができるのでしょうか。2年生の仁菅さんに発表を替わりたいと思います。

十条という街のまちづくりへの提案

言語文化コミュニケーション科2年 仁菅真里

東京成徳短期大学言語文化コミュニケーション科2年の仁菅真里です。観光を中心に勉強してきました。先ほどの発表に続きまして、観光を学びはじめたばかりですが、提案を考えてみました。といっても、先ほどの2人と同じく、「地域開発論」の受講生の意見を中心に自分なりにまとめてみたというものです。

私たち学生にとっての十条という空間は、先ほどのまとめにありましたとおりで、お店が多くて、物価が安く、ちょっとぶらぶらするにはちょうど良い、楽しい街だと思います。「地域開発論」の受講者のいろいろな意見をまとめて発表するのですが、ただ、まとめの段階で、いろいろな意見があつて困りました。例えば、ある人は活気があるといい、ある人は淋しい街だといい、またある人は子どもが少ないと感じていて、別の方は子どもが多いと感じています。同じ街並みを見ても、自分が住んでいる所との比較になりますので、受ける印象が人ごとにずいぶんと異なっているということが、私たちの十条に対する感じ方であると思いましたので、最初に、私たちの感覚が多様で、様々な見方をしていることを申し添えておきたいと思います。

「十条という街の特徴から」ということで、最初に次のような3点にまとめてみました。
「ノーマライゼイション」・「バリアフリー」・「道路の整備」

先ほどの白澤さんと蓑毛さんの発表にもありました、お年寄りが多い街です。またカラダの不自由な方も少なくないと思います。道路を整備したり、歩道を設置したり、信号を増やすなどの工夫が必要かと思います。高齢者へのサービス、福祉ボランティアなどの充実もこれからは大切になっていくと思われます。住んでいる人に優しい街になることが必ず必要になると思います。「パリアフリー」については説明がいらないと思いますが、歩道と車道の段差や店の出入り口の工夫なども、今後考えていかなければならないことだと思います。授業のメンバーからは、駐車場や駐輪場の設置という意見も出されました。

次に、「若者の街へ」という面から考えてみたいと思います。私たちの中では、いろいろな意見が出されたところです。「お洒落感のある店」・「カフェ・喫茶店・ファミリーレストラン」という2点にしましたが、例えば「温泉パークを作る」「デパートを作る」「駅ビル」「映画館」などが出来ました。若い人たちを対象にした店やイベントを考えてみること。また、カフェや喫茶店やファミリーレストランなど、10代や20代の人たちが来なくなるような店を作ったらいいのではないかと思います。若い人たちが楽しめるスポットを考えてみたいと思ったのですが、私にも具体的に何を作るといいのかはわかりません。ただ、この街で若い人たちが集まって楽しむ場所が少ないことは事実であると思います。

次に、「活気ある街へ」ということを考えてみたいと思います。

「富士神社の祭」・「オリジナルなもの・名物を作る」・「十条銀座を中心にイベントを増やす」という三つをあげました。例えば富士神社の祭です。この祭は楽しいのですが、十条駅のあたりには、お祭りの出店などが来ません。大きくしたらどうでしょうか。お祭りを活性化することは大切なと思うのです。

オリジナルなもの・名物を創るというのは、例えば現在、地方都市で試みられているものと同じです。宇都宮のギョウザ、茨城県では竜ヶ崎市がコロッケで街おこしをしていますし、神奈川県では横須賀がカレーの街としてのイベントを行っていますが、これらは全部、特別有名な店があったわけではなく、街おこしのためにこじつけたところから始まっているそうです。例えば宇都宮は、市民一人あたりのギョウザ消費量が日本一だったので、それで街おこしをしたわけです。おいしい店は街おこしを行った後に出てきたのであり、最初はただ食べる人が多かったことに目をつけたことが成功した理由だろうと思います。そういう意味で、十条も何か名物を考えてみてはいかがでしょうか。オリジナルな食べ物というのは難しいと思いますが、何か十条にちなんだ食べ物はないものでしょうか。このことについては、後でまたふれます。

次に「十条銀座を中心にイベントを増やす」ということです、今でもいろいろとイベントをやっていると思いますが、私たちにはイベント情報がほとんど届いていません。毎月決まった日に、縁日をやるというのは巣鴨ですが、そのような行事の導入や、商店街の裏もライトアップして明るくするなどの意見もありました。

続きまして、「商店街を中心に」という観点から、考えてみたいと思います。「歩き方マップ」ですが、こういうものが駅に常備してあればと思います。とりわけ、「十条ラーメンマップ」は使えそうな気がします。都内にある銀座通り、谷中銀座や戸越銀座などと比べて、十条銀座はアーケードがあって、店も多いと思われます。店を紹介する面白いマップは、訪れた人にとってもいいものです。当然普段から利用している人もこういうものを扱っているのかと発見することもあると思います。また、十条駅には、駅で設置した地図はありますが、地元商店街の見取り図のようなものはありません。できれば、駅にも商店街の歩き方地図を掲示して、駅を降りたところから、十条の街が始まるような形にしたらと思います。商店街の見取り図も大きいものを設置してほしいように思います。

「テーマソング」ですが、十条の商店街のための音楽があつたらいいなと思います。有名な曲や

懐かしい曲もいいのですが、何か明るい曲があったらいいと思います。フォークダンスの曲などを流したりしたら、踊りたくなりますし、ふれあいのある街らしくて面白いのではないかとも思います。

「スタンプラリー」もやっているのかも知れませんが、例えばラーメン店6店を回ったら記念品というようなものを期間限定で行ってみるとか、いろいろな方法が考えられます。

「ラーメンでまちおこし」ということですが、十条はラーメン店が本当にたくさんあります。「まちおこし」に結びつかないでしょうか。「ラーメンマップ」を創ることも一方法だと思います。また茨城県の水戸には水戸黄門にちなんで「黄門ラーメン」がありますが、十条ラーメンといいますか、オリジナルなラーメンを共同開発してみるのも面白いと思います。

和菓子屋さんも数軒ありますので、和菓子による「まちおこし」もあるかも知れません。和菓子の中の何にするのか、そこから考えることになりますが、十条にちなんだ和菓子はないものでしょうか。猫が多いという特徴を生かして、猫の形のお菓子とか、面白いかもしません。ちなみに、私の故郷では、猫祭というものがあって、猫の耳やしっぽなどをつけて、顔も猫らしく化粧して、踊りを踊るというイベントが8月にあります。

一番下の「公衆トイレ・ベンチ」ですが、今は駅のそばの交番の隣に、どちらもありますが、きれいなベンチはもう少しあったほうがよいと思いますし、公衆トイレも綺麗なものがあったらいいと思います。商店街や十条散策のついでに一休みできる場所としてあればいいのにと思います。

最後に、「誰もが知っている街へ」という項目にしてみました。先ほどの白澤さんと蓑毛さんの話にも十条という地名を知らない人が多いということがありました、十条という地名を、できるだけ多くの人に知ってもらう努力が必要であると思います。じつは個人的な話ですが、私はこの短大に入学するまで、十条という街も、東京成徳短期大学という短大も知りませんでした。観光が学べるということで、この短大を探しましたが、その時はじめて十条という地名を知りました。

4点ほど項目をあげたのですが、練馬には『るるぶ練馬』という練馬特集号がありますし、大田区にも『るるぶ大田』があります。他にもこういう特集号があると思いますが、例えば、王子と十条を特集した全国版の旅行ガイドのような町歩きガイドのようなものがあったらいいと思います。どうやったらそのような企画に採り上げてもらえるかは、わかりませんが、そのような出版物があれば、他の地域から人を呼べることになると思います。

「テレビドラマで使ってもらう」十条を特集した番組も時々ありますが、テレビドラマの舞台に、この十条を使ってもらう方法はないでしょうか。友達に聞いたところ、時々使われているような気がする、と言っていましたので、できればここを舞台にしたドラマができればと思います。

「イベントや名物、マップ」につきましては、何回も話しましたが、いろいろと実行してみるとが大切だろうと思います。成功するかどうかが、不安だろうとは思いますが、まずやってみるとが大切だと思います。

そして、やはり街は住みやすいことが第一です。高齢化社会対策は、どの自治体でも課題となっているはずですが、まず高齢者に優しい街として十条を考えてほしいと思います。住みやすく、下町風な思いやりのある街の特徴、十条の良さを生かして、十条を変えていってほしいと思います。

提案だけで、思いつきばかりですが、これで発表を終わります。

V シンポジウム開催の意義と効果

公開シンポジウム「十条という街を考える」を4回行った結果、次の4つの波及効果が得られた。

①地元商店会に、活性化のための活動のヒントを提示することができた。

②地域、行政、大学との関係が密になった。その結果行政の対応にも変化が見られた。

③ネット空間への情報発信にも、関心を向けられるようになった。

④学生が地域に関心を示すようになった。

以下、それぞれについて説明したうえで、総括を試みる。

第1回のシンポジウムの開催時は、いちょう通り十条駅西口商店会は、発足したばかりであった。若い人にも年配の方にも「居心地のいい街、住みよい街」にしたいとの想いを、いかに具体化していくかが課題となっていた。当年の具体的活動には、ライブ・青空市・バザーなどの企画があったが、これは翌年以降の「十条遊縁市」に結びついていき、現在も続いている。シンポジウムを行い、報告書を発行したこと、早稲田ほか多方面から十条に目が向けられるようになった。また、会場からの要望を受けることで、地域に合ったサービスのあり方について、さまざまなヒントを参加者が得ることができたものと思う。商店会としては、サービスの充実とともに、十条の良さを上手に広報する方法も、今後考えて行くことで、「昔のような活気のある商店街」を実現させる道が拓けることが、4年にわたるシンポジウムを通して明らかになったことと言えよう。

第1回から、北区の行政担当者にもバネリストとして参加してもらい、バネリスト相互の意見・指摘の応酬や会場からの質疑・要望に直接応答を願った。このことが、北区行政側との関係を密にし、その後のさまざまな迅速な対応につながったと思う。産業振興課は2003年に観光ホームページをスタートさせたし、また「十条遊縁市」も同年から行われるようになった。この年には「北区フォトコンテスト」や「北区名品ガイド」作りも行われた。毎週第3日曜日に「まちワークin十条」が行われるようになってしまった。役所がなかなか重い腰をあげないというふうに住民の目に映る地域が少くない中で、北区は「学校と商店街と行政ががっちりスクラムを組んで」、十条の活性化に取り組めたと評せよう。

情報発信にネット空間が利用できることが明らかになった点も、このシンポジウムの収穫の一つであろう。このシンポジウムも北区ケーブルTVで放映されたが、その動きのほかに、東京商工会議所北支部の「CM劇場」、富士見銀座の「まちなか工房」のHP（2004年までに北区のものづくりの達人77人をエントリー）等が紹介されて、ネットを通しての、地域への関心の育成ならびに交流・相互コミュニケーションの場の提供が、シンポジウム参加者に示された。なお十条には「まちなか工房」の他に、演芸場通りの「たまたて屋」、いちょう通りの「らくだBOX」というレンタルボックスの店ができ、地域の情報交流・情報発信を担っている。

学生も年を追うごとに、十条への関わりに意欲を高め、第4回では自らの調査・考察の成果を発表した。基調講演に変わる形で、「十条という街の印象」（1年生2名）、「十条という街のまちづくりへの提案」（2年生1名）の二つの発表を行った。学生が地域への情報発信者となる方法を作り上げることも、今後の課題であろう。2年間という在学期間の制約はあるが、授業を通じた指導の成果は現れている。学生が教室に座って授業を受けているだけでは、情報発信意識は生まれない。フィールドワークの重要性が、そこにある。十条を対象に自分の足でめぐる授業も不可欠であろう。もう一つは4年間のシンポジウムの学生の反応と成長ぶりを目の当たりにさせることで、学生に意欲を芽生えさせ、自主的に街づくりに関わっていくよう誘導もできよう。

4年にわたるシンポジウムを通して、十条固有の問題点も明らかになった。その問題点を行政・住民双方が意識して、相互の話し合いを通してより良い道を模索し選択していく。——その基盤が築けたならば様々な波及効果も期待でき、これに勝るシンポジウムの意義はないのではないかと考える。